

ネット社会で 生きざるをえない子どもたち

ネットとケータイ ～その光と影～
香山リカ氏の講演を聞いて

永野 勇氣

近頃、ネットやケータイが関与した事件に子どもたちが巻き込まれるケースが増加しており、マスコミでも連日この問題が取りざたされています。

こういった背景もあってか、今回の講演に集まった人々の多くは、子どもを持つ親世代の方々であったように見受けられました。`ネット、`や `ケータイ、`という、何やら「得体の知れない物」を肌身離さず持ち歩く子ども達と、日々その危険性を報道するマスメディアを目にする中で、不安になっているのでしょう。

香山さんはまず、ケータイやネットが持つ三つの特徴を示し、その「光」の部分に目を向けます。

第一に、その使いやすさです。例えばケータイを扱うとき、さほど難しい技術や知識は必要ありません。もちろん、個人差はありますが、基本的には誰でも使える仕組みになっています。第二に、その時間的な自由度の高さです。つまり、いつでも連絡でき、とりわけメールという手段によって、メッセージも確実に届けることができます。第三に、その空間的な自由度の高さです。これは、第二の特徴と関連して、「いつでも、どこでも」コミュニケーションを可能にし、さらにはネットによって「誰とでも」つながることができま

プライベートな領域の拡大

これらの特徴は、子ども達の好奇心を刺激します。その理由は二つ考えられます。まず一つは、そういつたいわば「グローバルな空間」が、「別世界」の存在を今まで以上に可視化することです。学校や家庭、地元といった身近な空間とは異なる未知の世界に、子供たちは魅かれ

るのです。

そしてもう一つが、プライベートな領域を拡大させる、ということ。子ども達（とりわけ思春期）は、親が思う以上に「秘密の領域」を欲するものです。ケータイはそういった要求をよりラディカルなかたちで満たします。つまり、親に気兼ねせずに、あくまで「プライベートな領域」として、友達や異性とのコミュニケーションが可能になるのです。最近のテレビドラマなどで、「恋人同士が、夜が更けるまで電話で語り合う」といったような描写がしばしば見られますが、やはりケータイという現代的な道具によって、「二人だけの領域」を作り出しているのです。

ではケータイやネットが生み出した新たな問題点、すなわち「影」の部分は、いかなるものでしょうか。香山さんは二つの大きな側面に注目します。

一つは、情報の氾濫といった側面です。つまり、保護者のより知らないところで、子ども達が有害な情報に触れてしまう、という問題です。最近では「出会い系サイト」のような、本来的に危険性を伴った情報も、望めば誰でも簡単に手に入ります。

もう一つは、ケータイによるつながりが、むしろ孤独や不安を生み出すという逆説の問題です。例えば、NTTのある調査によれば、十分以内にメールの返信がないと不安になるという小中学生の数は全体のほぼ六割を占めています。なかには、「返信時間は何分以内」と友達どうしでルールを定めて、それが破られることでいじめに発展するような事例も見られます。つまり、「返信がないことの不快感」や、「返信しなかったことによって、いじめられるという恐怖感」に、多くの子ども達が苛まれているのです。

香山さんは、これらの問題こそ、最も重要かつ厄介な問題であると言います。なぜなら、学校・家庭教育や、フィルタ

リングなどの技術、またはそういった有害情報の法的規制などによって、ある程度の対策は可能な前者の問題に対し、これらの問題は人間の心理や社会状況が複雑に絡みあつた結果発生しているものといえるからです。

問うべきは なぜケータイ依存に

もう少し具体的な説明が必要でしょう。この「ケータイによる不安、孤独の逆説」の問題は、言い換えれば「ケータイによるコミュニケーションへの、過度の依存」ということとなります。情報技術が革新的な発展を遂げ、コミュニケーション方法が多様化する現代においては、そのような「依存」状況は、まるでケータイという新たなメディアが、「直に会って話す」といった、従来では普通と見られてきたような「血の通った」コミュニケーションに取って代ろうとしているかのような印象を与えます。「ケータイを子ども達に与えてはならない」といったような風潮の根底には、大人たちのこういっただけの不安が深く関わっていると

ケータイが生み出す 孤独や不安

いう「血の通わない」人間関係に慣れきってしまった子ども達を、それを取り上げることによって、「血の通った」コミュニケーション空間へと解放してやるのだ」と。

しかし、それは問題の本質的解決にはならないと、香山さんは言います。なぜなら、右のような見方は、「ケータイに『縫らざるをえない』子ども達」という重要な視点を欠いているからです。

「つながり」への渴望

先ほど、「返信がないことへの不安」や「返信しなかったことの恐怖感」について述べました。このことは、むしろ子ども達の、「つながり」に対する過剰なまでの渴望を表しているものと言えます。私たちはともすれば、ケータイやネットというものを人間関係の希薄さ（つまり「血の通わない」人間関係）、といったようなイメージとセットで考えがちです。しかし、こういった「渴望」の事実は、もっと複雑な実態を露わにします。すなわち、子ども達は、「血の通った」関係を、「血の通わない」メディアによって実現する」という、無茶をしているとい

うことです。

自分を愛せない —自己肯定感のなさ

なぜそのように無謀な努力を、疑心暗鬼になりながらも続けるのか。香山さんは、それを「自己肯定感の欠如」という言葉で説明します。つまり、「嫌われるのではないか」「誰も自分のことなんて見てくれないのではないか」といった自己否定的な感情が、メールの返信時間の厳格な取り決めや、いわゆる「KY」の風潮といった、「これを守っておけばひとまずは安心だが、少しでも破れば即、排除」というような厳しいルール空間を友人との間に形成するのではないか、ということです。

従って、問題の本質は、この「自己肯定感」をどうすれば子ども達に持たせることができるのか、ということとです。とはいえ、ここに「これだ」といったような答えを見つけることは容易ではないでしょう。事実、香山さんは講演のなかでその具体的な方法を示すことはありませんでした。

しかし、少なくとも、「ケータイを認

めるべきか、認めず取り上げるべきか」といったような、単純化した議論にしても、あまり意味はないでしょう。今私たちに必要なのは、不安に駆られて「分かりやすいもの」に流されてしまわないだけの「冷静さ」と、問題を「自己責任」的なものにしてしまわないだけの「社会性」に他ならないのではないのでしょうか。

桶川・子育てと教育を考える会

